

**特殊教育キャリアアップフィールド
障害児教育実践センターにおける現職教員の研修（12年目研修）の
実践とその検討**

—柳戸サマースクールへの参加を通して—

障害児教育専修 神野幸雄

1. はじめに

平成15年度から、岐阜大学教育学部は岐阜県教育委員会の学校教員の12年目研修に協力し、夏期休暇中に5日間、現職教員を内地留学生として受け入れ研修を実施している。大学の教員一人ひとりが少人数の講座（コース）をもち、自分の専門性を現場の現職教員に提供し役立ててもらおうという趣旨である。筆者は、障害児教育実践センターで毎年8月中旬に実施している柳戸サマースクールへの参加（2日から3日）を研修内容の中心とし、残りの2日を事前の打ち合わせ・講習と事後の事例検討会にあてている。

2. 柳戸サマースクールの意義

神野（2002）は、柳戸サマースクールについて、次のように述べている。「岐阜大学で毎年夏休みに開催されている、学齢期の障害児の地域生活を支援する活動として、柳戸サマースクールがある。岐阜大学が柳戸キャンパスへ移転したのを機に、新たに一階につくられた治療教育講座（当時）のプレイルームとプレイフィールド（プール、ジャングルジム、すべり台、小山をもつ）をベースにして、柚木馥氏が1984年から開始した。夏休みの5日間、20名前後の子どもたちと多くの学生ボランティア等のスタッフが午前9時から午後3時過ぎまで生活や遊びを共にする教育実践活動である。1995年に障害児教育実践センターの施設がプレイフィールドと向かいあうかたちで完成し、柳戸サマースクールの新たな根城となった。筆者は、それと同じ年に岐阜大学障害児教育実践センターに赴任した。それ以来、柳戸サマースクールにスタッフとして参加しており、柚木馥氏が1999年3月に岐阜大学を退官してからは、その実践を引き継いだ。（中略）筆者が7年前に岐阜大学で療育相談を開始したとき、当時3歳だった2名の子どもが、筆者と一緒に初めてサマースクールに参加し、現在も継続して参加している。同じ場で同じ活動が毎年夏休みの一定期間くり返されることにより、子どもの成長、発達を確認することが容易となる。毎年連絡ノートに書かれる子どもの様子は、親にとって、子どもの成長を確認することができる貴重な記録であるだろう。」

筆者は、障害のある子どもの療育相談は、1度実施して完結するようなものではないと考えている。子どもの障害の診断・告知により親が心理的に不安定になる幼児期に、受容的な親子関係を築くことができるようにサポートする。その際、療育者は自らが子どもと実際にかかわり、一人の人格をもった存在として向き合い関係を形成しようとする姿を、親に示さなければならない。

頻回にそうした場を共有するなかで、親は勇気づけられ、障害のある子どもを育てることに前向きになっていくのだと考えられる。そして、就学後も、一貫して子どもを共通理解し相談できる人と場を、多くの親が求める。子どもが大きくなり成長するに伴い、新たな問題が生じ、親の悩みも変化する。ある時期が来て療育相談のニーズがなくなるということはないということが現実だといえる。

柳戸サマースクールは、筆者のそうした療育活動の一環として行っている。だから、夏休みにただ子どもを預かるだけの場ではなく、子どもが安心して仲間と共に過ごし、自己実現できる場をつくりだすことをめざしている。参加者は25名前後とし、筆者の療育相談を受けている子どもの中で、希望者の中から、小学校の低学年から高校生まで各年代から均等に選出し、声をかけるようにしている。母親たちにとっては、普段あまり経験することのない縦のつながりをもつことになり、そのことがとても意義がある。例えば、年少の子どもの親から、昼食作りの当番活動を協力して行うなかで、先輩の母親の体験や養護学校の中学部や高等部の話を聞けてとてもよかったという声を聞くことが多い。また、年長の親たちにとっては、かつての自分たちと同じように悩んでいる若い親たちを励まし勇気づけることで、自信や誇りをもつことにつながっていると考えられる。

3. 現職スタッフとの協働

親たちが安心して子どもをわれわれに預けてもらうためには、子どもとかかわるスタッフの側の体制づくりが必要である。主力となる学生スタッフは筆者の講義を受講している教育学部生であり、障害児教育以外の専攻で、ほとんど障害のある子どもとかかわったことのない人も多い。事前指導を充分時間をとって行い、「子どもの生命を預かるのだから、いい加減な気持ちでは参加しないでほしい」ということを伝えるようにしている。どのように動けばよいかは、やはり実際に子どもとかかわる中でわかっていくことが多いようだ。その際、どのように子どもとかかわればよいのかというモデルの存在が必要となる。もちろん、その役割は、療育相談で参加するすべての子どもとかかわっている筆者がまず担わなければならない。また、学生スタッフに一生懸命子どもとかかわることを求めているのだから、自らが汗水流してその姿勢を示すようにしている。しかし、屋外での活動プログラム（午前中は大学構内を散歩する）もあり、25名の子どもすべてを同時に視野に置くことは困難である。そこで、協力してくれる障害児教育や療育の現場で働くスタッフ（現職スタッフ）の存在が必要不可欠で、実際にはそうした人たちが有給休暇等を使って参加してくれることで成り立っている活動なのである。

現職スタッフとして参加してくれる人たちは、岐阜大学の卒業生で学生時代から継続して参加してくれている人と、参加する子どもの昔の担任であったり学校でかかわったことのある人が多い。いずれにせよ、年に1度子どもや親と会うことを楽しみしているようだ。学校に勤務するようになってサマースクールに参加することの意義について、次のような声を聞く。

- ・ 学校では、あまり規制のない中で子どものペースに付き合いながら、1対1で1日子どもとじっくり過ごすことはほとんどない。自分を見つめ直す機会になる。
- ・ 継続して子どもをみることでできる場であり、その成長・発達を確かめることができ、勉強になる。（学校現場では、転勤や学校内の移動があり、一人の子どもを長年みるのが困難で

ある。)

筆者は、こうした現職スタッフを協働者としてみなしている。決して、指導する・指導されるという上下の関係ではない。共に汗を流して、子どもが自己実現できる場を一緒につくっていくのである。そうしたなかで、筆者自身が学ぶことも多い。また、単に子どもについての情報を交換し共有するというのではなく、相互の信頼関係、尊重し合う関係を築くことが重要だと考える。

平成15年度、16年度の12年目研修で筆者の講座(コース)を選択し、柳戸サマースクールに参加した11名中5名は、以前からサマースクールに協力してくれている人たちだった。12年目研修として参加することで、事例報告のレポートをまとめることができた。次に、郡上市立八幡小学校のHT教諭と本巣市立真桑小学校のTA教諭が提出してくれた事例報告を紹介する。

4. 事例報告

a. HT氏のレポート

1日目 <Y君 男子(11歳 養護学校小学校6年生) 自閉性障害>

[活動の様子]

前任校で、直接担任はしていなかったが、授業なので一緒に活動することもあり、面識のある児童だった。母親からは、楽しみにしていたようで今日も朝早く起きたという話を聞くことができた。サマースクールには、毎年参加している児童であり、大体の流れはよくわかっていて朝センターに来るとまず、プレイルームに走りこんで行き荷物も自分から荷物用のカゴの中に入れていた。それから、トランポリンを跳び始めた。そこで、手をつないで「1、2、3」と掛け声をかけると初めて笑顔が見られた。それから、毎年いろいろなおもちゃが置いてある部屋に行ったが、そこは鍵がかかっており、入ることができずに戻ってきた。つぎに、プールまで行きプールの周りを回って様子を見ていた。一通り様子確かめるとまた、プレイルームに戻ってきた。本人には、サマースクールに対してこういうことをやるという思いがあるようで、そのことが朝の一連の見回りの行動で理解することができた。

体操と手遊びが始まったが、まねをしながらやろうという姿は見られなかった。また、言葉がけをしても人と人との間を楽しそうに動いて回り、プレイルームから出ることもあった。気になっているのはまず、プールであり、次におもちゃの部屋だった。手遊びでは、手をつないで輪になる歌遊びで一度その場から離れることはあったが、また自分から戻ってくることもできた。このように不意に離れてしまうこともあるが、自分で戻ってくることもでき、集団との間合いは自分なりにとっているようだった。

プールが大変楽しみだったようで、散歩の途中でもそのことを言葉にしていた。「プールに入りたい人？」等、自分に対して言われる問いかけで人に確認していた。馬小屋まで行って帰ってくる時は、大学の外周を大回りで帰ってきた。他のボランティアが持っていたミネラルウォーターが欲しくて自分のお茶を差し出して交換してもらおうとする姿も見られた。

昼食では、カレーを半分ほど食べた。あまり好きではないのか食は進まなかったが、「カレーをください」と言っていた。カレーを半分ほど残して片づけをする際、前に置いてあるカレーの鍋を見つけてまた「カレーをください」という場面があった。小皿にカレーをよそったが、少し手をつけただけで、残してしまった。オレンジは好きなようで五つほど食べた。

いよいよ楽しみのプールではあったが、始めのうちは声を上げて不安な表情をしていた。しばらくしてだんだん表情が緩みだし楽しそうに飛び込んだり、水につかったりする姿が見られた。そして、急にプールからでると、今度はお風呂の方へ走り出し、お風呂に一度つかりまた出て、プールの方へ戻ってきた。朝の時もそうだったが、一度先行してその場所へ行って確認する行動がここでも見られた。それで一度安心するとそれからは、プールで長い時間楽しんで遊ぶことができた。

プールから出る時は、終わったことを話すとすぐに出てお風呂の向かうことができたが、着替えてから気持ちの切り替えがなかなかできず、2回ほどプールに行くことがあった。2回ともプールの周りで様子を見るだけで遠くから見ている自分に対してチラッと確認を求める視線を送っていた。ただし、2回目はなかなか気持ちの切り替えができず、ブツブツと独り言を不満そうに言いながらプールから離れることができなかった。しかし、最終的には顔には不満そうな表情を浮かべながらも自分からプールを離れることができた。プールから離れるとちょうど全体ではおやつも終わっており、母親と一緒に帰った。

[考察]

毎年行なっている活動ということで自分なりの見通しをもって参加できていた。そして、大好きなプールができるのかプールまで行って水を見て確認する姿が見られた。見通しがもて、期待が高まるが故に不安になる姿も見受けられた。また、ボランティアと一緒に行動しなければという思いもめばえ始めており、そういった思いと自分の欲求との間でじれんまを起しているようにも思われた。好きなように行動しながらも直前で止まったり、遠くから確認を求めて視線を送っていたりする姿見れた。また、最後にプールへ走った際も自分で気持ちを切換えてプレイルームにもどることができた。時間はかかるが、少しずつ自分で複雑な気持ちを処理することができるようになっており、成長のきざしを見ることができた。

2日目 <F君 男子(15歳 養護学校高等部1年) ダウン氏症候群>

車から出るのに少々時間がかかったが、担当である自分に元気よく挨拶をすることができた。サマースクールの流れはわかっており、自分で荷物をカゴの中に入れ準備を行った。体操・手遊びが始まるまでF君が大好きな野球(ボールプールのボールをスポンジブロックで打ち返す)で遊んだ。玉が飛んでいき、それを担当である自分が取りに行くのが面白いようで大変喜んでいった。

体操では、まねをしながらできるところはやっていたが、難しいところは体を前後に揺らしてリズムにのっていた。手遊びでは、まねはしなかったが手をつないで行う「ぎっちらこ」では、楽しそうに手を振る姿が見られた。

散歩に出る際、トイレに行っていたため集団が出て行った後に出かけることになった。集団の流れにのれず、タイミングをはずしてしまったためになかなか気持ちの切り替えをすることができず、外へ出ようと働きかけても「いや」と言って応じることができずにいた。大好きなボールプールに入って中にあるボールを外に出すことに没頭してしまっていた。「お茶を持って行こう」など気分が変わるような働きかけをしたが、一向に応じる気配がなく「いや」を繰り返していた。

そこで、まず大好きな野球をやることでボールプールから離れることといこじになっている気

持ちを転換させることを試みた。ボールとバット代わりのスポンジブロックを見せるとすぐに応じることができ、しばらくプレイルームの中で野球を行った。そして、盛り上がったところで外でやろうと働きかけるとそれも応じることができ、センターの駐車場で同じ野球をやることのできた。

やるほどに楽しくなってきたので野球をやる目的で散歩に誘ったところ気持ちが切り替わったようでも応じることができた。スポンジのブロックは大きいので持って歩くのに便利なスコップ(プラスチック製おもちゃ)をバットにして大学外周を1周する散歩に出かけた。道すがら、野球をやることで気分を変えることができ、楽しみながら周って行くことができた。約2時間余りかけて外周を周ってきたが、その最中で座り込んだり、帰ろうとしたりしたことは一度もなかった。

昼食の準備は、配る仕事を大変よく頑張っていた。お盆をもって何回も往復して運んでいたが、厨房から汁を持っていく際にまずお盆を厨房の人に渡してお盆の上に汁椀を置いてもらうように促したが、その提案に対してはなかなか納得することができなかった。その時の厨房の周りには同じく配る手伝いをする子供が列を作っており、お盆は全員にいきわたるほどの数はなかった。そのため、配るためにお盆を確保したいと思う気持ちからなかなか手放せないようだった。汁物の配りが終わっても次から次へと配る仕事を手伝うことができた。

プールに入るのもいつも着替える部屋はわかっていて自分でその場所へ行って着替えを始めた。プールの中でペットボトルに水を入れ、いろんな人にかけていくことが楽しみの一つであり自分からいろんな子供やボランティアにかけて回っていた。40分位すると思いたったようにお風呂の方へ走り出し、今度はお風呂で同じようにペットボトルで遊びだした。そして、また思い立ったようにお風呂から出て着替えを始め、着替えを終えるとおもちゃの置いてある部屋へ移り、おやつまで鉄道のおもちゃで遊んだ。

おやつでは、昼食同様手伝うことができた。おやつ後にまた大好きなボールプールに行きボールを外に出して遊んでいたが、自分やボランティアが外に出たボールを片付け始めると外に出てバラバラになったボールをボランティアの方へ寄せ集める姿も見られた。一度ボールをプールの中に片付けてしまうとそれからは、そのボールプールで遊ぶことはせず、母親が来るまでお茶をのんで待っていることができた。

[考察]

F君も長年サマースクールに参加してきた一人で、自分なりのサマースクールへの思いがあり、楽しみにしている。サマースクールは、毎年同じような流れで行われおり、毎年の繰り返しの中でお気に入りの流れを作ってきた。F君の場合は、ボールプールとプールであった。それぞれの遊びのパターンもほぼ決まっており、ボールプールではボールプールのボールを外に出すことであり、プールでは、ペットボトルに水を入れては、ボランティアにかけてまわる遊びが大体であった。(過去の連絡帳より) また、最近では、ボールプールのボールを棒で打ち返す遊びも好きな遊びの一つとなった。

このように好きな活動がはっきりしており、自分なりの流れがはっきりしているF君ではあるが、その流れに沿って活動を共にする分には特に問題なく、昼食やおやつ準備等では伝いも自分からできた。しかし、その流れをさえぎるようなボランティアからの提案にはなかなか気持ちを切替えることが難しかった。F君にとってサマースクールは、学校での活動とは違いあくま

でも夏休みの予暇活動の一環であり、強制されるものではないようであった。そのため、あまり好きではない散歩については、なかなか出かけることができなかった。タイミングがずれてしまったこと好きなボールプール遊びが楽しくなってしまったことに原因があったと考えられる。ただ、散歩に対して極端に拒否する気持ちがあったわけではなく、ただ気持ちが切り換えられなかったことと、誘いかけに対してつっぱねるような心の状態になってしまったことが考えられる。そして、大好きな野球遊びで気持ちがりセットされたことが散歩に向かうきっかけになったと考えられる。それからは、途中で野球をやったりして気持ちをリフレッシュすることはあったが、2時間にもわたる長時間歩き通すことができた。

サマースクールは、長年行われている行事であり、その行事に長年参加している児童については、その児童なりの思いや願いがあり、そういった思いをくみとった上で1日を共に過ごすパートナーとして児童の特性をよく理解して働きかけることの大切さを新ためて認識することができた。

b. TA 氏のレポート

＜サマースクール1日目：8月10日（日）＞

担当のN君は、養護学校高等部1年生である。高等部入学以来、情緒不安定の状態が続き、学校では給食を一切食わず、1日に食べる量も減って、3か月で7キロ体重が減少した。保護者も自傷行為が激しくなったことを心配されていた。小学部6年生と中学部1年生の2年間担任していたこともあり、よく知った間柄であるが、中等部卒業以来接触はない。

初日は、母と別れることを少しためらっていた。玄関ホールで、神野先生の動きを確認しているようでもあった。無理にプレイルームに入れないで、体操が始まるようになったら、行くように指示した。神野先生が入室すると、しばらくして入室した。学生の山田さんと手をつないでいたが、「先生、つなぐ」と言いつないできた。体操では、ジャンプの所を一緒にやることができた。散歩では、山田さんを右に私を左にして、岐阜大学をぐるりと2周した。途中馬を見たり、触ったり、歌の一部と一緒に歌ったりして、楽しみながら歩いた。昼食は、カレーライスであったが、初めはいらないと拒否していた。食べさせると、一口食べ、認め励ますと実におかわりをして2皿食べたのである。心配していた食事ができてほっとした。

昼からのプールは、「この子どもこの子」の遊びを過度な刺激にならない程度に行い、要求があれば行っていった。終了時間まで楽しんだ。着替えの最中も自傷行為もなく、待ったり、自分で脱いだりすることができた。一緒についてくれた学生の山田さんも明日もN君と活動したいと思うほど楽しかったと感想をくれた。帰りには、母親も笑顔で話しをしてくれ、N君の充実した顔が嬉しかった。

＜サマースクール2日目：8月11日（月）＞

昨日は、よほど嬉しかったらしく気分が高揚して、夜寝付けなかったとの話を母親から聞いた。久しぶりに楽しい体験をしたようで良かった。担当は、私一人なのでそのことを伝え、今日活動したいことを聞いた。「散歩行く。先生と行く。」「プールはいる。」と楽しみにして活動に見通しを持っていた。散歩は、私担当が一人だった為、他の学生とも手をつなぎたがった。固執するが、言って聞かせると2人で出発することができた。ただし、両手をつなぎあう他人から見れ

ばかなり変な格好であった。N君は、歌を要求してきたり、動物の真似や五十音を一緒に言うことを好んだ。昨日は、要求することはあまりなく、やりとりを楽しむようになっていたことを喜んだ。途中から神野先生が来てくださり、一緒に手をつないで歩いて下さった。とても嬉しそうであった。2週目は、私と2人で五十音や歌を共に楽しんだ。

昼食は、自分で茶碗とコップを持ったので、自分で食べるか確認をすると「先生、食べる。」「お願いします。」というので食べさせた。食欲が戻ってきているようで、サラダ以外全部食べた。自分でお茶は飲んでいて、片付けも今日は皿とコップを片付けることができた。嫌がらずにすることができた。

プールでは、自ら水をかけ喜びのポーズをすることも多くなり、「この子どもこの子」を笑顔で楽しむ姿が見られた。天気がすぐれず、水が冷たく感じる日であったが、最後まで楽しんだ。おやつも食べ、連絡ノートを書いている間待つこともできた。帰りは、母親が来ても「帰りたくない」と言っていた。楽しい2日だったようである。自傷行為は全くなかった。

<サマースクール4日目：8月13日（水）>

散歩は、11日同様歌や五十音遊びを要求し、楽しく2周することができた。昼食は、自分でふりかけ御飯と肉じゃがを食べることができた。食欲も旺盛で片付けも手伝うことができた。プールでは、最後まで楽しんだ。着替えも自分である程度行うことができた。おやつは、団子をお代わりして食べた。活動に見通しを持ってサマースクールに参加することができた。迎えにきた母親も笑顔でリフレッシュでき、「安心して預けることができた。」と言っていた。

<事例検討会：8月21日（木）>

神野先生とN君とのことや中学部3年生のM君の指導方法について意見交換やご指導を承った。N君の簡単な考察は以下のようなものである。

5年間のサマースクールの経験が活動に見通しを持つことができ、日常生活習慣の維持、形成にも役立つことができたことである。サマースクールの帰りから「岐大行く。」と言って1日の生活を振り返って明日を楽しみに待つ姿があり、規則正しい生活に一役かうことができた。規制されず、不安がなく自由である遊びと生活の場があることや自分の行為を認めてくれる教師や学生がいることが、開放感を得て自分の持っている力を発揮できたと考える。また、保護者も子どもから開放され、心身のリラックスとリフレッシュを図ることができ、レスパイトケアができたと考える。これが家庭でも良い方向に向かい、安定して参加できた一因であろう。心配された食事も自分で食べることができ、着替えも3日目には大部分を自分で行う事ができた。なにより良かったのは、この5日間で楽しそうな笑顔が何度も見られたことである。充実感・満足感を味わうことができた。生活リズムを整えて2学期は、元気に学校生活を送って欲しいと願うのである。

5. 現場とのネットワークをつくる

長年、柳戸サマースクールに協力してくれているHT氏とTA氏のレポートから、その活動の意義や実践のねらいが実現されていることがうかがえる。長いスパンにわたる教育臨床活動を、同じ子ども観・発達観を共有して、仲間と共に取り組めることは、筆者にとって何より心強い。地道な実践を続けていかなければならないと思わせてくれる。

こうした現場教員とのつながりは、ギブ・アンド・テイクでなければならない。TA教諭が担

任している特殊学級の児童について、現在、障害児教育実践センターの平澤助教授と筆者がチームを組んで、学校生活への参加を促す取り組みを行っている。また、HT教諭の小学校の通常学級に所属する児童が2名、筆者の教育相談に通ってきている。そのこともきっかけとなり、筆者ら障害児教育実践センターの教員が学校を訪問し、職員研修を行うことになった。12年目研修で初めて出会った現場教員とも、そうした連携が始まっている。下呂市立小坂小学校のFK教諭は、平成15年度の12年目研修に、泊りがけでサマースクールに参加してくれた。事前事後の研修で、通常クラスに在籍する特別な教育的ニーズを有する子どもについて相談を受けたのだが、そのことがきっかけとなり、平成16年の9月には筆者が小坂小学校を1日訪問し、7名の児童の様子を見て、保護者と学級担任に相談を行った。

現場教員と子どもの教育臨床に共にかかわり、協力し合う関係をつくっていくことを、今後もめざしていきたい。

文献

- 神野幸雄（2002）「障害児の療育相談について－親子への支援における教育臨床的アプローチ－」
岐阜大学教育学部障害児教育実践センター10周年記念誌，8-12.
- 神野幸雄・林哲治・杉山章・奥村佳代（1999）「サマースクールの意義と実践（3）－ロング・スパンの視点からの子どもの理解とその支援について－」岐阜大学教育学部障害児教育実践センター年報，6，99-115.